西陣明治の群像⑧

識者　伊達弥助

明治六年、ウィーン万国博覧会が開かれたとき、副総裁佐野常民の随行員として渡欧した伊達弥助（四代）は、ヨーロッパに滞在二年、オーストリア式ジャカードをわが国に伝えた。

だがこの新技術に対する彼の対応は一風変っている。横井時冬『日本工業史』によれば「……東京山下門内の勧業試験場に機械を据付け、伊達弥助をして使用せしめられる。されども自己の工場にては別の見識ありて舊式の花楼を用いてさらにジャカードを用いざりき。」とあり、四方呉堂『織界の隠士佐倉常七君傳』では「始め君がジャカード、メカニックを教授するや、人々之を信ぜず。其功用を知らず。専ら之を攻撃す。彼の有名なる故伊達弥助氏の如きすら、之が不用を君に明言したり」とある。

せっかくオーストリアでジャカードを中心とする先鋭技術を修めたにもかかわらず、自家にあっては、これを導入しようとせず、いぜんとして旧来の空引機で織物を生産していたのである。いわゆる職人気質による新しいものに対する反発からだろうか。しかし弥助の場合そのようには考えられない。

なぜならば弥助は、化学や医学を修めたまれにみる学識豊かな機業家で、嘉永五年にはその知識を生かして天鵝絨に友禅染を着想、万延年間には二重綿天鵝絨を発明、さらに明治になってからは養蚕、製糸にも着目したほどの進取創意の人であったからである。

ジャカードの利点を十分に理解しながら、あえて採用しなかった裏には、西陣織に対する独自の見識があったためであろう。

旧来の空引機の織法にくらべジャカードの織法は、まだまだシステム化されたものでないだけに織技術としては未成熟であった。その現実を冷静に見つめた上で、自己の西陣織のイメージを表現するためにも、市場の要求する織物を製織するためにも、やはりまだ空引機によるほうがよいと判断したのであろう。

（福本武久）